

## 11 月度学術講演会

日 時	11 月 17 日 (土) 午後 2 時
演 題	腫瘍循環器学～がんと循環器の二刀流?～
講 師	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター 腫瘍循環器科 主任部長 藤田雅史 先生
出席者数	17 名
共 催	第一三共株式会社
情報提供 担 当	経口 FXa 阻害剤 リクシアナ錠・OD 錠について 富永良子

### がんと循環器

#### 1. 腫瘍循環器学 (Onco-cardiology) とは

がん治療の進歩によりがん患者の生命予後が改善され、近年では全がん患者の 10 年生存率は約 50% となっている。これらの患者が循環器疾患を合併することが増加しており、また心毒性を有する抗がん剤治療によっても循環器疾患を発症することから、適切な診断・治療が求められている。これらの背景から今後はがん専門医と循環器専門医が協力し、がん患者の診療に当たる必要があり、腫瘍循環器学 (Onco-cardiology) という学問が注目されるようになり、本年 11 月には第 1 回日本腫瘍循環器学会学術集会が開催された。

抗がん剤 (アントラサイクリン系やシクロフォスファミド、トラスツズマブ、TKIs など) によって引き起こされる心機能低下は、CTRCD (Cancer Therapy Related Cardiac Dysfunction) と呼ばれている。LVEF が 53% を下回る 10% 以上の低下とされ、 $\beta$  ブロッカーとともに ACEi/ARB の投与が推奨されている。心毒性のある治療を受ける患者は心不全に移行する可能性のあり、治療前に心機能を評価し、厳格にリスク管理を行う必要がある。

#### 2. がん患者における血栓塞栓症

がん治療によって起こる様々な循環器合併症が挙げられるが、本日は血栓塞栓症に的を絞り講演する。近年、がん関連血栓症 (Cancer-associated Thrombosis : CAT) という概念が提唱されている。がんが増殖・転移する際には様々な凝固促進因子を放出し、凝固系が賦活化されることに加え、化学療法剤によるがん治療によっても血栓傾向を呈するため、血栓塞栓症を発症する頻度が高く、特に十分な注意が必要である。一方で、がん患者は出血リスクも高く、病態を考慮した慎重な抗凝固療法の選択が必要である。欧米における VTE (Venous Thromboembolism : 静脈血栓塞栓症) 治療の第一選択薬は低分子量ヘパリンであるが、わが国では治療薬としての適応がなく使用できない。ワルファリンは優れた抗凝固薬であるが、抗がん剤との薬物相互作用に注意を要する。肺血栓塞栓症および深部静脈血栓症の診断、治療、予防に関するガイドライン (2017 年改訂版) では未分画ヘパリン・フォンダパリヌクス・ワルファリンと共に DOAC が推奨されている。海外で行われた大規模臨床試験 Hokusai-VTE Cancer では欧米で第一選択薬となっている低分子量ヘパリンとの非劣性が検証され、わが国におけるがん患者の VTE 治療において、低分子量ヘパリンの代替薬として期待される。

がん治療に心毒性があることを認識し、今までの経験を活かしさまざまな病態を呈するがん患者さんの、がん治療が完遂できるために循環器的な診療を行っていききたい。